

大正三年

正月元旦 晴天

舎生一同無事目出度新春を迎ふ、小生皆を代表して宮部先生及森氏の宅に年賀に参る

一月二日 雨天

午後六時半より舎長宮部先生の招待に応じ各自出席す、例年により大々的御馳走あり、種々面白き遊戯を演じたる後十一時頃帰舎せり。

一月四日 午後夕食後年玉を競売に附す。

スミ風呂敷 十六銭五厘 亀井君

一月五日○鉛 筆 七銭 小河原〃

スミ全 八銭 亀井〃

スミ写真券 四十一銭 楚野田〃

二月十七日○袋 一銭五厘 石橋〃

(欄外に附記の文 一月二日 田村君帰舎ス 一月六日武内君帰舎ス)

一月九日 海妻君退舎ス (同日夜)

一月十一日夜 田村君退舎ス

一月十一日夜 名越君退舎ス

全 秋元君退舎ス

一月廿七日夜 関戸君退舎ス 廿八日夜竹市君退舎

一月廿九日夜 園田君退舎ス

一月卅一日 月次会開催ス

二月五日 午後夕食後新聞雑誌競売を行ふ

スミ 太陽 (一月分) 廿四銭五厘 北村君

スミ 中央公論 (一月分) 卅二銭五厘 篠原〃

二月十七日スミ 北海タイムス 拾銭五厘 入鹿山〃

スミ 東京朝日 卅一銭五厘 小中〃

二月十七日スミ 萬朝 十四銭五厘 入鹿山〃

二月十五日 (日曜日) ピンポン大会ヲ午後一時半ヨリ举行

二月廿日 熊谷君退舎ス

三月三日 新聞雑誌競売を行ふ

スミ太陽 十銭五厘 小仲君

スミ中央公論 十一銭五厘 かめ井〃

スミ朝日 十七銭五厘 たか野〃

スミ萬朝 十銭 入か山〃

タイムス 十一銭 北村〃

三月廿日 午後三時 莊田君東京ニ向フ

三月廿六日 入鹿山、石橋両君出張ス。今回都合ニヨリ月次会ヲ中止セリ

四月一日 門野君オシヨロニ水産実習ノ為出發セラル

夕食後新聞雑誌ノ競売ヲ行フ

※太陽 八錢 北村君

※中央公論 八錢 小中君

※朝日 十八錢 木村君

※萬朝 十三錢 北村君

※タイムス 十四錢 佐藤君

※封筒 三錢 木村君

四月二日 入鹿山氏帰舎ス

四月五日 入鹿山君退舎セラル。石橋君帰舎セラル

本日○急ニ天気変リテ晴天トナル

四月十日 門野君忍路ヨリ帰舎セラル。北村君本日ヨリ木炭使用セラル

皇太后陛下御危篤ノ報至ル

四月十一日 本日午前二時十分皇太后陛下遂ニ御崩御トノ確報アリ、学校臨時休業トナル

四月十二日 テニスコート修繕ノ為舎生全員ニテ工事ヲナス、土運ブモノアリ、大工ヲスルモノアリテ午後二時頃全ク終エテ菓子ヲ喰フ、味素敵ナリ、働キテ後喰フハ甘シト皆々言ヒ居タリ、明日ヨリテニスヲヤルコトヲ得。

四月十二日 佐藤君炭ヲ使用セラル

四月十三日 珍シクモ雪降ル、舎庭ノエルムハ白銀ノ花ヲ以テ飾ヲシ美景愛スベシ

四月十八日 室換ヘアリ。寄宿舍の周囲ニ柵ヲ造リポプラヲ植ユ。

篠原君本日ヨリ炭廢セラル

四月十九日 日曜 庄田君博覧会アリ帰舎セラル

テニスコート完全トテ天気良ケレバ来客沢山アリテ賑カナリキ

広野演芸部長種ヲ前庭ニ播カル

四月廿五日 土曜 晴レ

此頃庄内館ヨリテニスマッチヲ申込ミ来リ練習スルコト熱心ナリ

夜ハ月次会、来賓宮部舎長、石沢氏ナリ

演説

一、余ガ慕フル友人ニ付テ 亀井

一、青年ノ元気ヲ論ズ 小河原君

一、青年ノ覚悟 広野君

一、友人ヘノ手紙（個性） 北村君

一、舎風ノ歴史 佐藤君

一、友情ニツキテ 石沢氏

一、感想 舎長

開会シタリシハ七時頃、終リタルハ十一時半、熱心ニ演説シ真面目ニ聞キ、甚ダ内容充
実ノ月次会ナリキ、其徒ラニ縁遠キ事ヲ言ヒ、徒ラニ御説御尤的ニ聞クハ月次会ヲシテ
益々嫌厭的ニ赴カシムル所以カ

当日御馳走ノスシハ委員ノ心配其当ヲ得テ甘キ事言筆ニ絶ス、尚委員氏名左ノ如シ
安井君、安達君、広埜君、多田君

四月廿七日 寄宿舍用時計ヲ修繕シテ持帰ル

四月廿八日 決算ヲ行フ

四月廿九日 門野君今日ヨリ炭廢セラル

スミ 東京朝日 十七銭 北村君

スミ 萬朝 十三銭 亀井君

スミ 中央公論 廿一銭 広埜君

スミ 太陽 十七銭 小河原君

スミ タイムス 十一銭 多田君

五月三日 加茂正次君入舎

五月六日 朝 舎生五六名円山ニ花見ニ行ク

五月十六日 午後一時ヨリ紀念撮影ヲナス

全七時ヨリハ送別会ヲ開ク 次第左ノ如シ

開会ノ辞 木村君

送別ノ辞 北村君

〃 多田君

入舎之辞 加茂君

送別之辞 佐藤君

訓 辞 宮部舎長

セシルローズノ話 高松氏

答 辞 安井君

〃 安達君

閉会之辞 木村君

終リテ茶菓散開、高松氏ヨリ寄附セラレタリ。

本日ノ会ハ例会ヨリ以上面白ク隔意ナク満足ナルモノト感じタリ、殊ニ舎長及高松氏ノ
演説ハ卒業者及残りノ者ニモ有益ナルモノナリキ

五月廿八日 決算ヲ行フ大凡ソ九円四十銭計リナリキ

五月三十日夜 競売ヲ行フ

太陽 拾四銭 森君

中央公論	拾錢	篠原君
萬朝	拾六錢五厘	佐藤君
朝日	拾八錢五厘	森君
タイムス	拾三錢	篠原君

六月廿日 本日学年試験終了ス

北村君気毒ニモ同君兄上病氣ニテ御逝去セラレ本日直チニ帰省。

六月廿二日 石橋君、本日昼十二時ノ汽車ニテ帰省セラル

六月廿五日 小堀君帰省セラル

六月廿七日 加茂君樺太へ向ケ出發セラル

六月廿八日 亀井君帰省 門野君修学旅行ノタメ東京方面ニ向ハル

六月卅日 朝、小中君実習ノタメ旭川へ出發セラル。本日夕刻成績発表アリタリ

六月廿九日 夜、六月分決算アリ

七月一日 本日、本学ノ図書館ニ於テ卒業式举行セラレタリ。

午後木村（武藤カ）政太君帰省セラル

（欄外に記入の文 我舎生安井勉君ハ農業実科ヲ卒業セラレタリ）

本日、仙台ニ於ケル門野君、亀井君ヨリ端書到来セリ、又徳島ニ於ケル石橋君ヨリモ通信アリタリ

七月二日 空知郡下富良野保線区ニ実習中ナル小中勇作君ヨリ通信アリ

本日ヨリ文芸部ニ於テ北海タイムスヲ取ルコトヲ契約シタリ。

七月八日 夜、小河原義雄君帰省セラル

〃十日 午前、庄内貞次郎君及篠原新英君帰省セラレタリ

七月十二日 午前、安井君、安達君、多田君及鷹野藻岩山登山ヲナス。

突然ノ思ヒ付ニテ安井君、安達君、多田君ト共ニ午前八時半頃藻岩山登山ノ途ニツク■
テ到ル札幌感化院ノ附近ヨリ山道崎■トシテ急阪胸ヲ衝クガ如クナルニ吾等下駄バキノ
仮装ナレバ疲ルハ事甚シ、加フルニ此日曇天ニシテ風無ク溽暑クシテ流汗ノ冷々タルヲ
禁ズル能ハザラシム、此レ半歳ノ蟄居ニ依リ身体ノ衰弱シタルニヨルモノナランカ、勇
ヲ（鼓）シテ登リ、十一時山巔ニ達ス、一同安堵シテ或ハ木ニ凭リ、草ニ臥シ、天ヲ仰
デ大息シテ憩フ、四顧豁達下瞰スレバ札幌ノ市街双眸ノ中ニアリ、薨、燦トシテ市ノ繁
華ナルヲウカバハル、而シテ豊平川ハ蟻蛇トシテ市ノ東端ヲ掠メ、水光緑樹ノ間ニ隠見
セリ、遙カニ前方ヲ望メバ石狩ノ沃野広茫千里ニ亘リ模糊トシテ際涯ヲ見ズ、只見ル石
狩川ノ洋タルハ素絹ヲ敷キタルガ如ク山川相繆ビ■乎トシテ蒼マタルトコロハ此ノ長江
ノ海ニ際スルノ辺ナランカ、時ニ尺八ヲ吹クモノアリ、其ノ音嚙唳トシテ鬼神ヲ泣カシ
ム、時ニ側ニ一人ノ紳士アリ、追分ノ一曲ヲ吹カンコトヲ請フ、吹手稍謙遜ノ体ヲ以テ
求メニ応ズ、其ノ声鳴々然トシテ怨ムガ如ク慕フガ如ク泣クガ如ク訴フルガ如ク余音

嫋々トシテ絶エザルコト■ノ如シ、幽壑ノ潜蛟ヲ舞シ、寒山ノ大熊ヲシテ泣カシム、聴者愀然トシテ心天地冥合シ仙境ニ在リテ天使ノ楽ニ恍惚タリ、俄ニ我ニカヘリ顧■スレバ呼手ハ吾舎生安達君ナリキ、今ニ於テ此レヲ想ヘバ其音ノ慕フガ如ク訴フルガ如クナリシカバ彼ガ親友安井君ト共ニ此ノ山ニ登ルノ最後ナリシヲ思ヒ怨ムガ如ク、泣クガ如クナリシハ二君袂別ノ日ノ将ニ近ケルヲ思ヒ遺響ヲ悲風ニ託シタルニハアラザランカ、十一時半、山ヲ下ル路ニ約一中隊ノ軍隊ニ遇フ、一時半帰舎スウ、牧童記之。

七月十七日 安井君ヲ送ル

今ヤ兄ハ三年間ノ業ヲ修メ錦ヲ着ル。兄ガ寛大ナル心、落付きたる態度常に我等ノ修養ノ手本トシテあふがれしが今ヤ遠ク去リ永ク別之年トハなりぬ。

此ノ兄ガ人格ト博識トを以テ世ニ出ヅル、その前途ヤ祝すべし、慶すべし。

七月十八日 多田、鷹野君実習を終り帰国さる。

七月十九日 夜、加茂君樺太より帰舎

七月廿五日 安達君卒業帰宅。

八月十日 朝、石橋君帰舎、忍路にて実習なるため早く帰へられたり。

(このページに挿入のメモ)

月次会委員の順序

入鹿山君 (十二月スミ) 石橋君 (十二月スミ)

門野君 (十二月スミ) 海妻君 (十二月スミ)

小河原君

木村君 北村君

熊谷君 小堀君

小中君 篠原君

関戸君 庄内君

藪田君 田村君

多田君 武市君

鷹野君 名越君

安井君 安達君

秋元君 亀井君

石橋君 門野君

富井君 加茂君

木村君 北村君

小堀君 小中君

篠原君 庄田君

多田君 鷹野君)

八月十四日 石橋君忍路へ実習ニ行かる。

同日 加茂君帰省。舎には佐藤独りとなる、今まで多人数居りし事なれば何となく物足らず、大きな寺に住ふ心地せらる。

八月十九日 石橋君病をえて忍路より帰へらる、早速札幌病院にて診察を乞ふ、チブスの疑あるとの事、腹部苦しき由、如何にも苦しげに、傍で見るとさへ痛はし。折角の実習も出来ず気の毒なり。

八月廿三日 病名不明の下に四五日苦しんで居った石橋君黄疸といふ事が解った。病氣知れると共に君の元気急についた様だ。

同日 鷹野君帰舎せらる。

八月廿九日 計算、一日平均二十六銭

九月五日 昨夜おそく、小中君実習より帰舎、又夕方亀井君帰舎、共に色黒々丈夫そーに見うけらる。これからは、七月と反対に一日毎に賑かになる、亀井君タヨリ食事ス

九月六日 早朝、篠原君帰舎セラル、有名ナル甲州葡萄ヲ馳走セラル

九月七日 小山正策君新ニ入舎セラル。君ハ香川県九亀中学出身ニシテ今度本学水産部ニ入学セラレタリ

九月六日 夜、在舎生一同宮部舎長ヲ訪フ、舎前ノ池等ノ事ニツキ談ゼラル

篠原君六日朝ヨリ食事セラル。小山君七日昼ヨリ食事セラル

九月七日 篠原、小中、亀井本日ヨリ電球ヲ取り戻シ点燈ス

九月八日 夕方、青木金作、石川虎二君入舎セラル。石川君夕食セラル。

小梶君ノ室ニモ本夜ヨリ点燈ス、盃シ石川君入食ノ故ナリ

小西初司君（農学実科一年）入舎、昼食ヨリ舎内ニテ食事セラル

雑誌雄弁購入ス、コレハ本月特ニ試ミノ為ニ買フ。黑板拭新調ス、文芸部員図書ノ整理ヲナス

九月九日 雨降りテ七時頃ヨリ霽ル、寒シ。

北村君早朝帰舎セラル 昼ヨリ食事セラル。午後、大矢敏範君（予科一年）入舎セラル 夜、予科三年小堀良弼君入舎セラル、食事ハ晝ヨリ。

次ニ藤岡鉄次（水産一年）君入舎セラル、食事ハ夕ヨリ

九月十一日 朝、予科一年小野栄次君入舎セラル、食事ハ夕ヨリ

小梶君帰舎セラル、夕食セラル。

本日始業式ニテ佐藤学長ヨリ一場ノ訓示アリタリ。

小雨アリ、寒シ、昨夜ト本夜トハ大黒座ニテ島村抱月監督ノ下ニアル芸術座主催、復活及嘲笑劇アリ、皆見ニ行ク。

九月十二日 皆本年度始メテノ登校ス

多田君昨夜帰舎セラル、今朝ヨリ食事セラル。多田君友人モ来舎共ニ食事セラル。

武市君午後多田君訪問セラレ、夕食セラル。 風吹キテ曇リナリ。

九月十三日 晴 但シ午前中ハ曇リ

木村君夕方帰舎セラル

山崎君ハ舎ニテ起居セラル

九月十五日 夜競売ヲナス

太陽 (増) 五銭 野口君

〃 (六月) 七銭 〃

タイムス 十銭 亀井

朝 日 十六銭 〃

萬 朝 十七銭 青木君

中央公論 七銭 藤岡君

山崎君従来ノ通寄宿セラル

九月十八日 山崎君復校許可セラレタリ

(欄外に記す文 十六日門野君帰舎セラル 但し食事翌日ヨリ)

夜委員会ヲ開く、来ル二十三日月次会ヲ催ガ故ナリ。

九月十九日 早朝、小河原君帰舎セラル、朝ヨリ食事セラル

同 日 山崎君新ニ入舎セラル事トナル。

(欄外に記す文 廿日 早朝かも君寄舎セラル、朝食セラル)

九月廿二日 小梶君修学旅行ノ為出發セラル、但シ朝食セラル

九月廿六日 小梶君旅行ヨリ十時過帰舎セラル。

月次会兼新入舎生歓迎会ヲ催ス

演題次ノ如シ

一、在舎生個々ノ歓迎ノ辞

二、佐藤副舎長ノ 〃

三、宮部舎長ノ 〃

四、新入生 当時

五、閉会ノ辞

内山崎君は撃剣ノ真価ヲ演説セラレテ皆ニ冬季蟄居ノ候ヲシノガン事ヲ勸ム

宮部舎長ハ禁煙禁酒ノ教大ナルヲ説シカシテ吾等ガ此主義ノ本ニアルヲ幸福ナリト称セラル

終りて余興ニ移リ心ヲ開イテ談笑ス、殊ニ野口君ノ浪花節、小中君ノ詩吟ハ良声ノキ(ワミ) 閉会シタルハ十時ナリ

当日委員左ノ如シ

小中、小河原、北村、篠原君

委員改選ノ結果左ノ如シ

食事委員 門野君

運動 〃 篠原君

衛生 〃 加茂君

会計 〃 小梶君

文芸 〃 山崎君

因ニ入舎セラレタル十名左ノ如シ

水産 野口君、小山君、藤岡君

土木 青木 〃

農実 石川 〃、小西 〃、山崎 〃

予科 小埜 〃、小野 〃、大野 〃

九月廿八日 夕方石橋君保養ノタメ外泊セラルトテ出発セラル所ハ東二丁目ナリ

九月廿九日 此日ヨリ網走方面ニ旅行セラレ居リタル多田君本日帰舎セラル、食事ハ明日ヨリ。

九月卅日 本日夕方、中島顕三君（予科一年）入舎セラル、但し食事ハ明日ヨリ。

本日、決算ヲナス。

十月三日 土曜日

此度委員改選により亀井徳次君より引き続く、時に時雨肅々晩秋の気身に迫るの思有り。

夜に入り晴天一碧十四日之月ハ冲天に懸り明日の兎狩も有望なり、一同草鞋等求めて準備せり。

十月四日 日曜日 晴天

四時起床、食后直ちに停車場に向ふ、団体切符にて軽川迄一行二十六人五時発、明け行く郊外之影を車窓に挑む又快なり、二十分にして軽川着直ちに追はむとする草原に向ふ、昨夜来之雨にて道路稍泥湿日未だ出でず冷氣身にしみて冲身凜然たるを覚ゆ。

橋を渡り運河に沿ふて行く、行く事数丁、第一回の狩を試みたれど不況只笹露に濡れしのみ、二回三回～五回皆不成功に終りしが、六回に至りて遂に一頭之捕獲物あり。

時に十時、皆勇み喜び不覚喚声を発す。中食後、運河に沿ふてひたすら下りに下ると雖も橋梁を見ず、野口、小堀其他の数氏は河を渡る、他は猶ほ下りて石狩街道に出づ、漸く河を踰ゆるを得たりと雖停車場に向はんとすれば、復小川あり、しばしいずれも躊躇せしが佐藤君、鷹野君徒足渡りせしを以て皆渡る、附近に乾燥せる草把を集め急抛仮橋を架したり、足を失して水にはまりし多田君あり、快亦滑稽なり。

思ふに異境の野に戦ふ兵士の事ども想像するに余りありといふ可し。

帰途再ビ狩ると雖失敗、四時半駅に至れば、渡河連已に待てり、五時発六時帰舎す、元氣益々盛んにして放歌市人を驚かす。

晴朗なる天気、吾等の快を増したるも何ぞ舎生以外の人にして今日の挙加わりし者、高地君、中学生二人、肴屋、夜ニ入りて明月殊に佳なり、遊興禁ずる不能、観月之会を催す。「月白ふして星疎此良夜を如何せん」の句も思ひ浮ぶ。

枝豆を賞ずるや月に誘はれて

十月五日 月曜日 快晴

夕食に兎汁之饗有り、一同甘食す。夜ニ入りて月明一室に屏居し難し、本日富貴堂より雑誌代取りに来る、しかし未だ収入なきを以て支拂せず。

十月六日 火曜日 快晴 無異

十月八日 木曜日 朝庄田君帰舎、佐藤君之室ニ起居サル

十月九日 庄田君退舎サル

十月十日 中食後亀井君登別方面ニ旅行ス

夕食后、新聞雑誌の競売をなす。

太陽 九月分 拾七銭 小山君

雄弁 九月分 拾銭 北村君

萬朝報（十月分）拾三銭 北村君

朝日（十月分）拾九銭 鷹野君

タイムス（十月分）拾五銭五厘 亀井君

雄弁を求む

十月十一日 日曜日 晴天

有志を集めて手稻登山をなす。七時四十分発、軽川駅に向ふ、九時光風館着、登山証を得て直に登山を初む、胸突八丁等急坂殊に甚だし、団子坂等手すりによりて纔に登るを得たり、十二時半頂上に達す、雲ありと雖ども眺望を不妨、蝦夷富士之秀、眼下の紅葉、札幌岳、天狗岳、恵庭、樽前の諸山何れも秋光を放ち人をして恍惚たらしむ、中食后眺望を恣まゝにすること一時間余にして下山す。光風館に着きしは三時半、一同待ち合せて直ちに駅ニ至り五時発にて帰舎す、車中、放歌、諧謔、匍匐せしむ。

一行、佐藤君、小堀君、北村君、小堀君、多田君、高野君、中島君、野口君、山崎、高地君以上十人也。

大矢君帰省す。

十月十二日 月曜日 晴天 夕食後室替をなす。亀井君、大矢君帰舎す。

十月十三日 火曜日 晴天

本日ヨリ三日以内ニ各室之大掃除ヲ行フ可キヲ以テ多ク本日之ヲ行フ、行ハザルハ二三ニ不過。

十月十四日 水曜日 雨天 本日モ亦二三室大掃除ヲナス

十月十五日 木曜日 晴天

二室大掃除ヲ行フ、本日ヲ以テ全部大掃除ヲ終了セリ、十七日定山溪旅行ニ於テ明日ヨリ行ク者ハ夫々準備ヲナセリ

十月十六日 金曜日 快晴

明日〇〇〇にて休日なるを以て門野君、野口君、篠原君、佐藤君、藤岡君、小河原君、小中君 君等は弁当携帯にて定山溪に向ふ。

夜に入りて残りの明日出発者準備をなしたり。

十月十七日 土曜日 晴天

朝食后九時一同定山溪之探勝せむと舎を出づ、一行は何れも米、味噌、肉、芋、玉葱、菓子、林檎と夫々分担して持す、紅葉せる山を眺めつゝ豊平河に沿ふて上る、平地のつくろ所丘陵あり、曲折極まりなき阪路を或は上り或は下り遂に苔間之細道となる所 両山相逼まり、岩身を河に露はし時に素簾をかけ紅葉之間に見せて対照の妙を得たり、五時最後之組も着きたり、高山旅館に至れば昨日出発之舎生欣々然として迎ふ
直ちに湯に入り一室に集り食后より一同廊下を挟んでへぼのけの戯をなし放歌乱舞二百余の遊客して唾然たらしむ、眞に痛快を極めたり、十一時就寝。

十月十八日 日曜日 曇天

朝食前思ひ思ひに或ハ入湯し、或は散歩を試み、或は写生し或は採取す。十時朝食食后直ちに帰りたる生、門野君、其他六名、他ハ昼食後二時発、篠原君ハ後整理之為め居残りたり。八時半全部帰舎せり、思へば此行や実に二日を有益に且つ大いに英気を養はしめたり。

十月十九日 月曜日 晴天、昨日の疲労をも忘れて一同登校す。

十月廿日 水曜日 晴天

昨日之文部(武)会月寒行は雨にて本日に延ばされたり、朝来聚雨来り怪しき天候なりとも快晴したれば八時の煙火にて愈々支度して校庭に集る、一同は八時半出発、乱雑極まる列をつくりて蛇行す、マラソン撰手は十時出発と聞く。
夜来之時雨は紅葉を塵舗かせ泥濘を極めたる道路を彩る、十時牧場着、待つ間もなく駿足疾駆し来りて撰手之着を報ずと見れば白装の二影を彼方に認む。須臾にして決勝点に着く。

一着 予科 二着予科 平岡

三着 農実

而して注意すべきは吾舎より多田君、野口君の二選手を出し共に十何着とて賞与に預りたり、吾舎も有望、學術に運動に大いに發展すべきなり。

国家将来益々多事ならむとす豈それ懈■放逸を貪るべけんや

マラソン終了后牧場に出て風雨を冒して中食す、豚汁豊富頻りに喫す、后牛乳出づ、食后歡迎之辞ありし等、如例最後に宝さがし餅を分配されて解散す、本日之天候ハ晴雨極まりなく帰りには霽さへ降りて大いに日本男子を鍛鍊するに足る。所恨は此天与え好機を有しながら馬車之便を応用したる者有り、平生言為之間に於て鍛鍊せざれば何事か成らむ。

十月廿一日 木曜日 本日篠原君定山溪より帰る

委員会を開き創立紀念会之件を決議す。

十月廿二日 金曜日

予科の発火演習日なり、夜に入りて各地の寄宿舍出身者に案内状を出す。而してコンパを開きたり。

十月廿四日 日曜日 晴天 東西に別れてテニス大会を開く、東側の勝なり。

十月廿七日 火曜日

放課後実科より購ひたる杓子菜とりに行く。馬車一輛、車力二輛にて終る、記念祭の準備ニ忙はし。

十月卅一日 土曜日 晴天 天長節

来る十一月三日に開催さるべき吾舎創立十六周年寄年祝賀会を都合上本日開く、朝食後各委員は夫れ※※準備にとりかゝる、諸事の運び好都合にして五時半頃より来賓も来り稍色めき亘る、工藤君来り間もなく森氏夫妻、宮部先生も来られて続き上杉、荒川氏と千客万来おすな※※※の勢況を極めたり、只石沢氏夫妻を待ちたり、六時石沢氏も亦来舎六時より卓に就き夕食を喫す。

御手製料理の美味舌打ならし、来賓諸氏の讃辞さへ頂き本日委員ハ大に面目を施したるなり。

食後小憩、此間に会場を作る、七時より開会、佐藤副舎長の辞ありて運動部、文芸部、会計、舎の順序を以て諸況の報告をなす。

来賓の祝辞、宮部先生、森氏、石沢氏、工藤氏の祝詞あり、森氏は労働を甘じてするの習慣を作る必要及利益を述べられたり、佐藤氏の閉会の辞ありて萬歳三唱終りて直ちに余興に移る。

余興

一、オルガン手風琴合奏 小河原君

小中君

二、劍舞

山崎

三、力士土俵入

有志

四、手品

北村君

五、活人画

石川君

小河原君

青木君

亀井君

六、福引

余興係

七、浪花節芝居 佐倉宗吾甚兵衛

渡しの場 小西君

藤岡君

野口君

八、劍舞

小河原君

九、歌

亀井君

十、詩吟

小中君

十一、柿山伏 狂言

小西君

	藤岡君
十二、一かけ節	青木君
十三、手品	篠原君
十四、唄	小堀君
十五、林檎園	農実生五人
十六、阿呆陀羅教	小西君
十七、特等列車	門野君
	小堀君
	篠原君
	小西君
	石川君
	小堀君
	藤岡君
	野口君
十八、オイトコ踊	藤岡君
	野口君

以上二時終了、真に一日の歓を尽したり。
 (欄外に、十一月二日 大矢君退舎す)

十一月三日 火曜日 雨天 夕食后競売す
 雄弁 十月号 貳拾一錢五厘 亀井君
 太陽 〃 拾八錢 〃
 朝日 十一月分 参拾六錢 多田君
 タイムス 〃 拾七錢五厘 佐藤君
 萬朝報 拾九錢 藤岡君

而して本日石臼のへそ、活修養とを購入す

十一月七日 土曜日

青島陥落す、本日より炭を入れたる室は野口君、鷹野君、小中君、多田君の室なり

十一月八日 夜各会社乃提灯行列あり、札街不夜城を呈す。

十一月九日 晴天

小学校及女子職業学校の旗行列あり。

夜は我大学文武会の提灯行列にて文武会事務所前に集合、桜星会は馬車にて繰り出し停車場通りより富貴堂前を通りて遊園地に出で道庁前にて万歳三唱、再び停車場前に出て万歳三唱、解散せり、時二八時。

本日青嶋陥落祝捷提灯行列の歌を配付す (春爛漫の譜)

一難攻不落と誇りたる

青嶋城も丈夫の
鎧の袖に散りはてぬ
いざや祝はむ諸共に
我が日の本の国の名を
世界にあげし今日の日を
二凱歌の聲の空高く
仇し叢雲吹きはらい
御稜威にかゝる陰もなし
いざや■はむ諸共に
万国無比の帝国を
皇統無窮の帝国を

十一月十日 火曜日 霰 本日は休み、門野君炭を用ふ

十一月十七日 火曜日 亀井君ストーブニ移す

十一月十八日 水曜日

夕食後委員会を開き、廿二日日曜日夜、月次会を催すことに決議す、委員多田君、鷹野君、青木君、山崎

十一月廿三日 日曜日

六時半より月次会を開く、開会之辞を山崎述べ、それより直ちに演説に移る、満外小西君の皮切り杜君、野口君の政界漸く多忙、北明篠原君の友人紹介、四海東小埜君の復活の福音とは何ぞや、五其外小野君の戦争観、六一雲藤岡君のどっこいしょ、七所感、晚香中島君、八野遊、金鋒亀井君、九時局感想天風小中君、十心湖丹石川君、十一文明之意義海川多田君、十二静海小山君の明日、十三牧堂鷹野君の国力伸長策、六頭山崎の山師、十五山佐藤君の憂国等なり、最後に宮部舎長の御話ありて閉会、茶菓之饗応と共に六人投票をなす。

一推薦博士 小堀君、二易者 亀井君、三慈善家 野口君、六村長 篠原君に当撰したり、以上

十一月二十五日 三木君入舎ス (土木実科一年)

十一月廿九日 土曜日 夕食後競売を行ふ

太陽 七銭	藤岡君
日本及日本人 八銭	佐藤君
旭 三十一銭	鷹野君
萬朝 拾七銭	北村君
タイムス 二十五銭	山崎
西洋手拭 十九銭	小中君

十二月五日 土曜日

本日より小河原君の室にストーブを廃して火鉢を用ゐむと申出ず。

十二月十九日 亀井君の室ストーブニス

十二月廿日 夜、小河原君退舎す。(欄外に、二十一日 寒稽古初メ、小野君帰国す)

十二月廿二日 (加茂) 夜来電報頻に來りて父の病を報ず、故に朝、帰国す。

有志の士、石沢氏を訪問したり。

十二月廿六日

本日月次会なれば夕食后直ちに食堂に集まる、來賓としてハ石沢氏一人、宮部先生は他用にて出席なし、本日は演説割合に盛なり。

一小中君、二北村君、三山崎、四多田君、五亀井君、六篠原君、七野口君、八三木君、九木村君、十石沢氏、十一佐藤君の順序也

石沢氏は人は其本分を尽也、即ち感謝せよの意を述べられたり、終りて茶碗廻し、錢廻し等余興として一時閉会就寝す。

本日宮部先生方へ歳暮を贈る。

夜、石沢氏より歳暮來る。

十二月廿七日 朝餅搗をなす。故に寒稽古連は中食后道場に行く。

十二月廿八日 決算日、夕食后競売をなす。

太陽十二月分 拾貳錢 中島君

雄弁 " 拾五錢 佐藤君

朝日一月分 四拾五錢 多田君

萬朝一月分 二拾五錢 藤岡君

タイムス 二拾四錢 野口君

右之通りなり。(欄外に、本日農学実科一年生日野君入舎セラル)

十二月廿九日 曇

本日前文芸部委員山崎君より文芸部事務引継をす。

現金貳円貳拾貳錢引継

新任文芸部委員 野口静 [印]

全日「朕が作戦」を購入す。

本日水産科一年生小山正策君一身上の都合の為帰京せらる。

又土木学科二年小中勇作君退舎せらる、先に小河原君の退舎あり、近来舎生の減少頻々たり、嗚呼、天吾に組せずや。

十二月卅一日 本日は大正三年最終の日なり。

原稿ヲ集メタ

八時半ヨリ図書室ニテノ忘年会ヲ催す。味柑、ソバの御馳走アリタリ、〇〇■、錢廻シ等アリ、団欒の中ニ十二時閉会ス